



Title	『夢占逸旨』外篇について
Author(s)	上野, 洋子
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 2004, 38, p. 65-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11517
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『夢占逸旨』外篇について

上 野 洋 子

はじめに

『夢占逸旨』は、明の嘉靖四十一年（一五六二）、陳士元（一五一六―一五九七）によって編纂された。⁽¹⁾この書は、陳士元が広範な資料を渉獵し、自身の思索を盛り込んだ夢の專論である。全篇には陳士元による自注が附されており、これによって、本文が基づく典拠、及び陳士元の見解を知ることができる。全体は八卷三十篇から成り、内篇十篇（卷一―二）、外篇二十篇（卷三―八）に大別されている。⁽²⁾この内、内篇は夢や占夢について十の視点から説いており、理論的性格が強い。内篇のこうした性格については、既に江口孝夫氏、大平桂一氏も指摘する通りである。⁽³⁾また、筆者も内篇全体の思想について、分析を加えたことがある。⁽⁴⁾

これに対して、外篇は夢に関する様々な事例を蒐集している。その特色としてまず挙げられるのは、特定の事例ごとに蒐集を行う点や全体の形式が、『芸文類聚』『太平御覽』などを代表とする類書と似ていることである。外篇の構成は、天と関わる「天者」「日月」「雷雨」に始まり、地上の自然物である「山川」、人間に関わる「形貌」「食

衣」「器物」、そして什器や動植物などの項目へと続く。このように、おおよそ天・地・人という枠組でまとめられる分類方法は、中国における類書に見える特色であり、先行する占夢書の中にも、こうした形式によって構成されるものがある。ならば、『夢占逸旨』外篇は、こうした類書や先行する占夢書の形式を踏襲するのみで、これといった独自性を持たないのであろうか。また、外篇が、単に関係資料を列記するだけの類書の性格が強いとすれば、理論的性格の強い内篇とは、さほど関連を持たない、まさに資料集であつたと言つてよいであらうか。ところが、外篇には、今ひとつの特色として、例えば「日月は極貴の徴なり」(日月篇)のように、事物が象徴する内容について説明し、時にはその吉凶の占断を示すという、占夢書の内容とも似た性格を挙げることができる。

これに関連して注目されるのは、大平氏の指摘である。氏は外篇について、「夢の内容に即し、その夢がどういう意味をもっているのか、歴史上の人物がその夢を見てどのような運命がもたらされたのかを具體例で検証」したものだ⁽⁶⁾と述べている。これは、「日月は極貴の徴なり」を例とすれば、武帝の母などの実在した人物が、日月に関する夢を見て、天子の子を授かつたという事例を引き、日月が極貴の象徴であることの正当性を証明するといったものである。⁽⁷⁾この指摘は、外篇が関係資料の列記というよりは、むしろ何らかの必然性を持つて編纂されたものという可能性を示唆しているように思われる。果たして、外篇からは、類書や占夢書に似ること以外にも、何らかの特筆すべき点を見出しうるのだらうか。また、内篇と外篇との間には、どのような関係が認められるのであろうか。そこで本稿では、『夢占逸旨』外篇について、その全体構造を分析し、その特色について考察を進めることとしたい。

(一) 外篇の構成

まず、外篇の構成を見るために、その全篇名を挙げる。(便宜上番号を附す)

- | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|---------|---------|---------|
| (1) 天者 | (2) 日月 | (3) 雷雨 | (4) 山川 | (5) 形貌 | (6) 食衣 | (7) 器物 | (8) 財貨 | (9) 筆墨 | (10) 字画 | (11) 科甲 | (12) 神怪 |
| (13) 寿命 | (14) 鳳鳥 | (15) 獸群 | (16) 龍蛇 | (17) 龜魚 | (18) 草木 | (19) 施報 | (20) 泛喻 | | | | |

ここで注目したいのは、各篇が夢の何に重点を置いて蒐集を行なっているかである。例えば、(2)(7)では、夢の中で「日月」や「器物」を見た事例を主に集めている。このように、夢の中で見る事物に蒐集の重点が置かれているものは、外篇の全二十篇中、(1)～(10)、(14)～(18)と最も多い。これらを「第一群」と呼ぶ。

この第一群とは別に、蒐集の重点が必ずしも夢に見る事物に置かれていない篇として、(11)(12)(13)(19)がある。(11)は、何らかの夢を見た後に、及第するといった事例を主に集めている。科挙と直接結びつくのは夢の内容というよりも、むしろ夢見た後の「結果」である。(12)は、夢の中で不思議な出来事が起こり、その後、実際に起こった出来事も不思議なものであったという事例を主に集める。(13)は、夢の中で自分の寿命を告げられたり、何かの夢を見た「結果」、実際その年齢まで生き長らえるといった事例を主に集める。(19)は、善行や悪行の後、夢で謝礼や非難を受け、目覚めた後は、善行や悪行に応じた形で禍福がやってくる事例を主に集める。これらに共通するのは、蒐集の重点が、夢の内容よりも、むしろその後の「結果」にあることである。これらを「第二群」と呼ぶ。

最後の第三群として、上記の二つと異なる性格を持つのが(20)である。第一群、第二群は、共に夢に見る事物、もしくは夢見た後の「結果」に重点を置く蒐集であり、事例の羅列と言ってもよい。しかし(20)については、江口氏が

「一篇の締めくくりである。夢占のあり方、夢と覚醒、夢の真理性、偽夢、最後に自著の弁をつけている」と述べ(9)るように、事例の羅列とは言い切れない。詳細については後述するが、夢や占夢について、何らかの論が立てられているという点で、第一群、第二群とはやや異なるものと考えられる。

このように、外篇は、事例の蒐集、「天」「日月」などに分類する構成という点で、確かに類書に似ていると言える。しかし、各篇の内容をより具体的に見てみると、蒐集の対象が必ずしも統一していない、変則的な蒐集を行う点、また、外篇の志向が、実は事例の蒐集以外にもあるのではないかということを示唆する(20)の存在など、類書には見られない外篇独特の性格も確認できる。

次に、外篇が、事物の象徴性やその兆候を明示する点について考える。まず、事物が象徴するものを説明する箇所をいくつか挙げよう。

天は群物の祖、至尊の位なり。(天者)

日月は極貴の徴なり。(日月)

雷雨星電、雲飈火冰、晴晦の類、皆天象なり。風雷は号令と為し、雨は恩沢と為し、瑞星彩雲電火は文明と為し、冰泮は婚媾の期と為す。(雷雨)

山川、道路、土石は皆地の属なり。王充論衡に曰く、山陵楼台は官位の象なり。人夢に山陵に升り、楼台に上れば、輒ち官居の位を得と。斯の言を信じれば、則ち峰巒殿閣は、貴顕の標と為す。江海波濤は財富の徴と為

す。(山川)

財貨の夢は、珠玉錢帛の類是なり。糞穢木石を夢みる者は財貨を得。珠玉錢帛を夢みる者は光顯多し。(財貨)

ここでは、例えば「山陵楼台」は「官位」の象徴であり、山陵や楼台に登る夢を見ると、官吏の位につくとされている。こうした説明は、事物の象徴によって占断を行うという、「象徴的解釈法」に通じるものであり、外篇が占夢書としての性格も帯びていたことを示している。⁽¹⁰⁾

また、こうした性格は、文型の上からも指摘できる箇所がある。基本的に外篇は、誰が何を夢に見たか、そして場合によっては、その後どうなったか、または吉凶の占断を示す文型を用いている。なお、陳士元が編纂者の一人として関わったものに『夢林玄解』があるが、ここにも右と類似する文型によって占断が記されている箇所がある。⁽¹¹⁾ その文型は、基本的に、何を夢に見たかが始めに挙げられ、次にその吉凶、詳細な説明が続く。このことも、外篇の占夢書としての性格を示唆していると言えよう。

ところが外篇は、単に夢の占断を記すのではなく、占断を導くまでの過程についても慎重な態度を示している。では、その外篇の慎重な態度とは、具体的にどのようなものなのであろうか。

(二) 外篇の思想

外篇には、「乃ち舟車の器の若きは、夢に應じて亦た殊なる」(器物)とある。これは、同じ器物でも、舟や車ではその夢兆が異なることを述べたものであり、こうした記述は外篇にいくつか散見される。また、「財貨の夢は、珠

玉錢帛の類是なり。蓂穢木石を夢みる者は財貨を得。珠玉錢帛を夢みる者は光顯多し（財貨）という記述の後には、夢の事例が並び、続けて「それ財貨の夢は一ならず」とある。このように、一つの篇として分類された事物が、（例えば「器物」が「舟」や「車」などのように）更に細分化されると、そこから導かれる夢兆も細分化されるという考えは、主に「一ならず（不二）」「同じからず（不同）」という表現を伴い、次のようにも述べられる。

樓台城郭に至りては、厥の兆同じからず。（山川）

詞賦歌謡の夢の若きは、則ち驗を取ること粉然として一ならず。（筆墨）

夫の坎豕、艮狗、兌羊の若きも亦た皆家畜なるも夢兆同じからず。（獸群）

また、これらとは別に、ある占断に対しては、それを甚だ疑問視する態度も窺える。

范延光 蛇の腹に入るを夢みて異志を蓄える。……南斉遙光の敗、群蛇は夢を城人に見す。あらわ然るに詩に虺蛇は女子の祥と為すと謂う。豈に尽く然らんや。（蛇龍）

豈に特だ詩人衆魚の夢、豊年に応ずるのみならんや。……胡の妻 魚の水盆に躍るを夢みて姪を生む。太守劉之亭 魚の命を乞うを夢みる。（亀魚）

蛇を女子が生まれる象徴とし、衆魚を豊作の象徴とすることは、それぞれ『詩経』小雅の斯干、無羊に見える、

伝統的な理解であるが、外篇は、その「蛇」―「女子」、⁽¹²⁾「衆魚」―「豊作」という、一対一に限定された占断を疑問視している。その根拠となるのは、蛇や魚を夢に見ても、結果として女子の誕生や豊作と結びつかなかった事例の蒐集である。また、

劉敬宣は夢に土を吞みて吉、梁の太宗は夢に土を吞みて凶なり。又た豈に一端に論ず可けんや。(食衣)

のように、同じ土を吞む夢でも、場合によっては吉、凶のどちらもありうるため、その占断は一概に論じられないとも述べられている。⁽¹³⁾

このように、外篇は、「不一」「不同」といった、占夢の対象を細分化して考える態度、及び一対一という限定された占断を疑問視する態度を示している。外篇は、ある夢について、吉凶の判断を下す場合もあるが、その占断は必ずしも一対一に限定されるものではない。言い換えれば、外篇は、一つの事物に対して、複数の解釈が存在する可能性を常に想定し、占断の過程に対して慎重な提言を行ない、注意を促している。これは、即断を肝要とする占夢書とはやや異なるものだと言えよう。

以上の考察から、外篇の特色とは、単なる事例の蒐集や明快な占断を示すということよりも、むしろ占断を下す際の留意点を示すところにあるのではないかと考えられる。またこのことは、「簡単に割り切つて読者に安易な判断を与えることをしない」「個々の夢例を集めて、安直に經典化・規範化しないところに、むしろ価値を見出すべきであらう」という江口氏の見解とも関連すると思われる。⁽¹⁴⁾

では、外篇のこうした特色は、具体的にどのような思想を反映しているのだろうか。外篇には、占断を下す際

の留意点を示すといった態度が指摘できる他、次のような態度も見える。

樓台城郭に至りては、厥の兆同じからず。漢の明帝金人の御殿に行くを夢み、唐の明皇諸仙の月宮に遊ぶを夢む。……曼卿芙蓉城主と為り、歐仲純長白山君と為り、蔣兎泰山伯と為り、趙父澧州の神と為り、玄宗九天の採訪宮を造り、陸洎九州の陽明府に判たりて、崔宅疾を后土に禱り、徐精子を生み社公と為るが若きは、則ち又た夢の怪誕にして、究詰するに難き者なり。（山川）

ここでは、漢の明帝の夢に始まり、その後は、建築物関係の事例が並ぶ。しかし、その後の「石曼卿芙蓉城主と為り」から始まる事例は、死後の世界や仙界と関わるものである。外篇はこれらを「夢の怪誕」、即ち夢において怪しくとりとめのないものであり、突き詰めて考えることは難しいとする。これは一見、理解の困難な夢に対する反抗とも思われる。しかし、これまでの考察からしても、これは占夢の信憑性を疑い、占夢を放棄しようとするものとは言えない。「究詰するに難き」とは、裏を返せば、それだけ占夢には慎重な態度を要することを意味する言葉であり、また、「蛇」——「女子」のような限定された占断に再考を促し、より正確な占夢を模索しようとする考えと相通じるものだと考えられる。では、そうした考えに至った要因とは何なのか。次に挙げる陳士元の言葉がそれを示している。

周の盛んなる時、文治大いに興る。何ぞ吉夢を得るを以て拝受せん。……衛国の嬖人讒して太叔を逐いし自りして占夢の術始めて憑む可からず。安虜祠を立て、夢を援きて以て帝を欺き、楊の妻子を生み、夢を引きて

以て夫を欺く自りして夢始めて占う可からず。悲しいかな。豈に夢の不効ならんや。(泛喻)

ここでは、まず周の文王が吉夢を信じ、丁重に扱ったことを示す。しかし、後には衛国の嬖人が占夢を悪用して太叔を追放したこと(『左伝』哀公十六年伝)を挙げ、ここから「占夢の術」は「憑む」ことができなくなったとする。加えて、安禄山が夢の話を巧みに用いて玄宗を説得したこと、楊氏の妻が夢を利用して夫を欺いたことを挙げ、ここから夢は占うことができなくなったと嘆く。これらを受けての「悲しいかな。豈に夢の不効ならんや」からは、夢や占夢の価値が貶められたことに対する陳士元の憂慮が窺える。また、

文虔晴を祈り、許份雪を禱り、達奚雨を請うの夢は、則ち精誠感格し、上下流通す。亦た恒理なるのみ。未だ訝るに足らざるなり。(雷雨)

との記述は、夢や占夢に普遍的な道理としての意義付けを行おうとするものだと言える。

以上の記述からもわかるように、夢や占夢に大きな価値を認める陳士元にとって、占夢が悪用されたという事実には慨嘆すべきことであった。慎重かつ正確に占夢を行うべきであるとの考えは、こうしたところに端を発したのではないかと考えられる。またこのことは、前述した泛喻篇の中で様々な角度から述べられている。

泛喻篇は、「泛喻は切思にしかず、博評は約説にしかず」という言葉から始まる。「泛喻」(幅広い範囲にわたる喩えを用いて考えること)は、「切思」(深く考えること)に及ばず、「博評」(博識を以て言葉多く述べること)は、「約説」(言葉を選んで的確に説くこと)に及ばない。この「切思」「約説」の重視は、言い換えれば、占夢の方法

論とも言えるであろう。

また、「鯉湖仙廟に至りては、夢に祈りて徵有り。蓋し川嶽の靈は人の休咎を知る。故に夢に託せば其の幾朕を洩らすのみ」との記述は、夢こそ靈妙なる神々が人の禍福の端緒を託す場であることを述べている。その他、「元魏沙門を詔誅するに、明帝の金人は虚妄より出づるを以てす。此れ固より關邪の確論にして、要す占夢の円機に非ず」とは、北魏太武帝による廃仏運動の際、漢の明帝が仏教を信仰する契機となった夢が批判されたことに對する意見である。夢を虚妄とする論は、仏教を邪教とし、それを排斥するという考えに偏向したものであり、占夢の道理を捉えたものではないとする。

以上のように、占夢の方法論、禍福の端緒が託される夢、占夢の円機についての論は、夢や占夢の価値を認め、それらを重んじる思想を如実に表わすものと言える。特に、「切思」「約説」の提示と、衛国の嬖人らによる占夢の悪用を嘆いていたことを考え合わせれば、外篇の思想とは、占夢を行なう時の慎重な態度はもちろん、それを支える徳性をも重視する、いわば人道的な夢観に基づくものだと考えられる。

実は、こうした傾向は、内篇の占夢理論によっても裏付けることができる。その代表的なものに、「五不占」「五不驗」がある。⁽¹⁵⁾そこでは特に、邪想と妄想、意図的な歪曲、二心を抱くという、人間の邪な内面や不正な態度を戒め、正しい占夢の在り方を、主に道德的な面から示している。⁽¹⁶⁾

『夢占逸旨』において、夢の理論を記す内篇と、資料蒐集としての面が目立つ外篇とでは、思想性の有無という点で、全く関連がないかのように見える。しかし、以上の点を考え合わせると、実は、両者の間に思想的な連続性のあることが確認できるのである。

おわりに

『夢占逸旨』外篇は、ある特定の事項に関する事例を蒐集し、それをまとめて閲覧できる類書、及び夢の吉凶を端的に示す占夢書に類似する特色が窺えるものであった。しかし、この点について、より踏み込んだ検討を行なった結果、以下のような結論を得た。即ち、外篇は、一見類書や占夢書のような性格しか持たないようであるが、実は、占夢の価値を認め、また占夢に携わる人々に対しては、道德的な意識を求めるといふ思想を持つものである。また、このことから、外篇と内篇との思想的な繋がりについても確認することができた。

内篇と外篇という形式により、夢や占夢に対する思想を明確に記す『夢占逸旨』は、夢書の中でも特異な存在だと言える。本稿では、外篇を中心にその思想を考察したが、それは、複雑な体系を持つと思われる『夢占逸旨』の思想の一端にすぎない。思想体系という大局的な問題については、内篇を中心とする、多角的な視点からの考察、また、明代の一知識人がこうした書物を著わすに至る、当時の思潮との関係についても考察すべきであるが、これについては、今後の課題としたい。

注

(1) 以下、『夢占逸旨』の引用に際しては、陳士元撰『帰雲別集』（道光十三年応城呉毓梅校刊同治十三年修補本）所収の『夢占逸旨』を底本とする。陳士元、字は心叔、号は養吾。正徳十一年（一五一六）応城に生まれる。嘉靖年間に進士。万曆二十五年（一五九七）、八十二歳で没す。

(2) 真宰・長柳・昼夜・衆占・宗空（巻二）、聖人・六夢・古法・吉事・感変（巻二）。以上、「内篇」、天者・日月・

雷雨(卷三)、山川・形貌・食衣(卷四)、器物・財貨・筆墨・字画(卷五)、科甲・神怪・寿命(卷六)、鳳鳥・獸群・蛇龍(卷七)、龜魚・草木・報施・泛喻(卷八)。以上、「外篇」

- (3) 江口氏は、特に内外篇の区別をせず、『夢占逸旨』を「夢判断書としてだけではなく、夢の理論的な著述として、江戸時代には親しまれていた」ものとし、また、全篇の概要を記している(江口孝夫氏『日本古典文学 夢についての研究』(風間書房)一九八七年)。大平氏は、内篇について「夢を見るメカニズムを解説し、夢を起源によって分類した原理論から成り立」つものと述べる。また、「陳士元が理論的に夢の本質を研究」したとの記述も、『夢占逸旨』の性格を示すものであろう(大平桂一氏「中国人の夢——古代から現代まで——」田中淡編『中国技術史の研究』京都大学人文科学研究所(同朋舎)一九九八年)。

- (4) 内篇については、平成十五年度修士論文『『夢占逸旨』研究——陳士元の「夢」の思想——』で論じた。今後は、そこでの考察をもとにして、論考を執筆する予定である。

- (5) 夢書における分類と類書との関係については、湯浅邦弘氏「夢の書の行方——敦煌本『新周公解梦書』の研究」『待兼山論叢』第二九号 哲学篇(一九九五年)に詳しい。氏は、「中国の夢は、類書の分類に端的に見えるような、事物の側に力点を置いた枠組によって認識・整理されてきたと推測」し、『夢占逸旨』の分類に対しても、「基本的には類書および従来の夢書の分類を踏襲」すると述べる。

- (6) 大平氏前掲論文。

- (7) 本文には「昔漢武帝之母、有神女授日之夢」とあり、自注から『漢書』の引用とわかる。

- (8) 各篇の名称は、冒頭の二文字を取ったものである。各篇が収める事例には、例えば、「雷雨」篇に星や雲などの夢が見えるように、篇名と合致しないものもある。そのため外篇は、相互の関連性が比較的強いものについては、同じ篇に収めるという体裁を取っていると思われる。

- (9) 江口氏前掲書。

- (10) この点と関わるものに湯浅氏の論考がある(前掲)。氏は、いくつかの事例を挙げ、事物の「イメージを踏まえて夢の意味が解説されて行く」ことを示しつつ、その解説は、「大局的には、事物の象徴によって占断を導かんとする

象徴的解釈法である」と述べる。

(11) 『夢林玄解』は、「夢占」「夢禳」「夢原」「夢徵」の四集に大別される。本稿が注目したのは「夢占」であり、その構成は、外篇同様、天・地・人という枠組に沿っている。天象部、地理部、人物部、形貌部、政事部、什物部、棟宇部、服飾部、飲食部、蕃臬部、飛走部、珍玩部、文翰部、名数部、長柳図、甘徳図の十六部から成る。現在見られる『夢林玄解』は、やや複雑な編纂過程を経たものである。陳士元の序によると、陳士元は『夢占逸旨』を著した後、『田夢秘策』なる書(晋の葛洪の原本に、宋の邵雍が纂輯を加えたときれる)に増刪を行ない、『玄解』と名づけたという。後に、明の何棟如なる人物がそれに重輯を加えるなどして、現在の『夢林玄解』となった。何棟如の序によると、陳士元が関係するのは「夢占」の部分であるという。

(12) 自分の腹部に蛇が入り込む夢を見た後唐の范延光は、その夢が王者となる兆しだと知り、謀反の心を起こした話や、南斉の始安王遙光が敗戦する前、城内の人間は、城の四方から蛇が出る夢を見ていた話など。

(13) 土を呑む夢は『夢林玄解』地理部にも見えるが、「吉」「凶」という占辞は付いていない。ただし、「此を夢みる者は宜しく謹慎省畏し、徳を修めて以て回さん」という記述から、好ましい結果を示すものではないようである。注目されるのは、その後外篇と同様、劉敬宣と梁の太宗の話が続くことである。このことから、陳士元は土を呑む夢について一概に論じられないという態度から、これら二つの話を増補し、更に、本来記されていた占辞を削除したのではないかと推測される。

(14) 江口氏前掲書。

(15) 「五不占」とは、「神魂未定而夢者、不占」「妄慮而夢者、不占」「寤中撼病而夢未終者、不占」「夢有終始而覺佚其半者、不占」を言い、「五不驗」とは、「占夢之人、味厥本原者、不驗」「術業不專者、不驗」「精誠未至者、不驗」「削遠為近揉大為小者、不驗」「依違兩端者、不驗」を言う。

(16) この「五不占」「五不驗」については、(4)前掲の修士論文にて詳述した。本稿では、その一部を示すに止める。

(大学院後期課程学生)

SUMMARY

關於『夢占逸旨』外篇

上 野 洋 子

『夢占逸旨』是明嘉靖四十一年（一五六二），由陳士元（一五一六～一五九七）所編寫的書。此書是講解有關夢的書，是陳士元在廣泛地涉獵資料之後，再加進了自己的想法所完成的。『夢占逸旨』大致分為「內篇」和「外篇」。內篇是十個視點來考察從夢和占夢，理論色彩濃厚。外篇蒐集了有關夢的事例。當中我們能指出兩個特色。（一）依據每個特定事例進行蒐集，以及全體的形式跟類書相似。（二）象徵事物的說明，以及占斷吉凶跟占夢書相似。本稿將透過具體地考察這些特色，探討外篇的思想。

首先，關於外篇的與類書相似的特色，先具體地考察外篇的結構和內容，接著我們可推測外篇在事例的蒐集以外是否也有別的旨趣。

其次思考與占夢書類似的特色，從說明象徵事物的這個特色來看，我們可以判斷，它是使用了籍著事物的象徵來占斷的「象徵的解釋法」。表面上，外篇像占夢書一樣由象徵的解釋法來占夢，可是另一方面，它對占卜的過程所採取的態度却是相當謹慎。那麼，這箇慎重態度是什麼？也就是說，占夢書中的占斷是只限定在「一對一」的方式，像「蛇」—「女子」、「衆魚」—「豐作」。可是，外篇對一件事物通常保留了複數的解釋，並對占卜過程進行了慎重的建議。這點是和一般重視立即占斷結論的占夢書相違的地方。我們可由此得知，外篇重視著夢及占夢的高度價值，也反映了占夢需要慎重態度這樣的想法。

此外，外篇當中所提示的「切思」「約言」（表示占夢時的慎重及正確的態度的用語）意涵著占夢時的所需要的慎重態度，以及重視人類道德的人道夢觀。這樣的傾向，我們也從內篇的占夢理論，尤其是「五不占」「五不驗」來得達驗證。在『夢占逸旨』當中，記載夢論的內篇與以資料的蒐集為主的外篇之間，表面上看起來好像沒有思想性的連續性。可是，透過這次關於外篇的考察，我們明白了其實內篇和外篇之間是有思想上連續性的。

キーワード：『夢占逸旨』，陳士元，占夢，類書，占夢書